



新板
入

赤島幡子初編 第一卷



へ遠13
1.613
1



1613
1

金

蔵書

十
蔵書

赤鳥帽子都氣質序

蔵書

印

武

人已と知る事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

己人の志す事以て己人と志す

後あり。人よ病もろく換か紀事。此
 心ひ亦重敷れつろくと防たりと
 こそかむむと世質と著てあま
 かりしし僕がい言病乃中にむ
 このむ碎中の色ごねらん

水井
 他友
 飛友



赤鳥帽子の氣貨物目錄

第一之巻

附の八情の法因まのくむらぬあつたれ
小野小町うの相と毎二対は田屋の排け
後ら

第二之巻

附のとほし夢のよそ屋よあひここの裡
東中

第三之巻

古風な侍あはれの舞あまのあはれ
 雲を巻る一人むじりあ

附

全書を讀むに當りては中巻の青巻一巻も亦記の如く其の
一と云ふは其の人の體のよきなる所の巻を中巻と云ふは借
りて其の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の

第一之巻

大坂の町宅に那波格筋目の
在所に居るをまてのりまる

附

あつてそのけりては其の青巻の巻を讀むに當りては其の
巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を
讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに
當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては

第二之巻

夜すてあつてその女房のりて男に
自傳を讀むに當りては其の

附

一冊の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の
巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を
讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに
當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては

赤鳥揚子都賀質卷之一

一 八幡宮の社内とまいくするれが源いたのりて
賣物毎に一冊はあつてその巻を讀むに當りては其の

附 小聖小町も及ぶぬりて其の巻を讀むに當りては其の
巻を讀むに當りては其の巻を讀むに當りては其の巻を

一と云ふは其の人の體のよきなる所の巻を中巻と云ふは借

附 全書を讀むに當りては中巻の青巻一巻も亦記の如く其の

一と云ふは其の人の體のよきなる所の巻を中巻と云ふは借

附 全書を讀むに當りては中巻の青巻一巻も亦記の如く其の

一と云ふは其の人の體のよきなる所の巻を中巻と云ふは借

附 全書を讀むに當りては中巻の青巻一巻も亦記の如く其の

一と云ふは其の人の體のよきなる所の巻を中巻と云ふは借

此借よりあざし。上系でなまらた家通のつ人はかりては
と此名と付而し宗函家此月並今なきは物序し
百矢之他の付合ふ事しきけてゆる時鬼のそをてきこ
中より與してころび朋友又足せて我と日ごろは漢を平
云合て交われお撲あつひは是はあはまん業のなごれは縁
日よへ身地の交りやわけ。自らの交りを攻つれどよかい
時八日のれとまらうひそへまんやしのるん見まひり。今も此
まのりれやうま神として身地の交りやわけの宛のわくはま
さん念のくご月かれあさうとよまわけよ漢と此名を漢
でんあつ時ひあ節にうあつとよひいかりとうけ。乃てあつれ
地のやうりうりあつてまいりりくしてたのひむきこあじ
うりた。さて一年く巨投さるるやどまれのころにあつりかき

て漢書よりらんを漢書林を宗函むの交りやわけをさるりあ
あてお入るまうどとあつたの人はかり。巨投とうりてま
系兵と押。宗函よりそをせの我やどまよひは系大坂あを希
まんともうくく漢とよ此名はあつて西人むぐまんたはよ
は戸名漢中ても漢書集あつてその交りよを封ててごし。
漢書より系兵たのこよまては系通とていさうあつてさふ
うりそめあも此名おほきどあつた。此借かど智とまごくめい
ま。そをも智あつてとさ人のけあゆとてころんあつての
あかさひらのそまよはんけど。育又よ好まらん格あさるいそ
たうこて人あつて代とけし。あつて自ちうりり時へ此借のけ押
むりりして高貴神をそく。げあつては父よはあさるは河よと
ま。母のやうりくあつて午一の年女房と入るが。今甲一はあて



つひにふぶもどがみ海づみとせん形立り結へ
ついでとどあたる町をわきの海濱と申す七月晦日は
福海と申すお宿をひきまのけしを以
てた内をひきまのけしを以てた縁かけはた
ついでに月日を七月はあけらるるじやまきい入振も
かへりもしては海の高さうけしよといの同とて
百日のふひでら。水はほほせぬ郡の町井のあえかひも
くとい町と申す此用をいも若男女と申すお宿をひきまの
うぶとけしをひきまのけしを以てた縁かけはた
ついでに月日を七月はあけらるるじやまきい入振も
かへりもしては海の高さうけしよといの同とて
百日のふひでら。水はほほせぬ郡の町井のあえかひも
くとい町と申す此用をいも若男女と申すお宿をひきまの
うぶとけしをひきまのけしを以てた縁かけはた

ついでに月日を七月はあけらるるじやまきい入振も
かへりもしては海の高さうけしよといの同とて
百日のふひでら。水はほほせぬ郡の町井のあえかひも
くとい町と申す此用をいも若男女と申すお宿をひきまの
うぶとけしをひきまのけしを以てた縁かけはた
ついでに月日を七月はあけらるるじやまきい入振も
かへりもしては海の高さうけしよといの同とて
百日のふひでら。水はほほせぬ郡の町井のあえかひも
くとい町と申す此用をいも若男女と申すお宿をひきまの
うぶとけしをひきまのけしを以てた縁かけはた

古又日より日ごとくは大西うらむ村中おとよ二班より
 福子みづづちゆけてそまきそ入用その口これのまはは
 つりり又子ふつぬうずして新さうぬ附の香月一初も
 中清とみほりしきんと利しそくつそり生入物とや
 うけずいぬうしてうらあそとあるこみやうけり福目か
 づるを田をまづつひのまはは物村中へ今かまきまき
 て下よりませぬしそで今井那を金徳今たにうらごび
 こそくきんせいのふと下やそまきられ今ぬえくまき
 新役よみまづづちを妻いゆけつらうまのそ十日づけづ
 あものめぬさう小村中へまきまづけとそでかすらら
 るづがよ入者もそとぬとつせーのひ百年ま人もたか
 るまこれいぬうよじうま南とや名人の能借作がゆ

原のそりうらうとけりれ福翁大明神へ共いり。さうや田も
 又先がられ神まきとくや香るとま絶くくまはたらまら
 まうれとより大西うけしゆうごひす。け附もあそでこれよ
 ちふふ抱入て口探とあそとま。又小神小町のぬをねい
 中さげともいそんてあままをせしていふゆくを屋とそと
 うら。そまきうの村中へまきまきとまきくを屋も今まきれぬ。
 ぬえくまきとみづちやまのひあまうま。まきとけいを屋より清
 村とくしほりいびの村もぬ知て二日づは二子村とらり
 ぬえくまき。ゆもまきとらちあり。今いぬをまきとらり。ま
 きまきとぬえくまきとみづちかき。まきとまきとらり。ま
 けい。まきとらちまきとらちまきとらちまきとらちまきとらち
 月のごらぐ福翁ののどや。ねまきとらちまきとらちまきとらち

西の氏神は平太夫の神と下でわたり。東の所は地蔵の寺で、
のこいしはまじりやうとて大書とての神ありて、
勢いもまじりやうとて。西のふ植の池の所、
あらかまじりやうとて。大書とて。西のふ植の池の所、
いけの所とて。西のふ植の池の所、
一が百姓を教へ合ひやうとて。西のふ植の池の所、
のころにいかりの付て。西のふ植の池の所、
神ありて。西のふ植の池の所、
りて。西のふ植の池の所、
とて。西のふ植の池の所、
大書とて。西のふ植の池の所、
も十とて。西のふ植の池の所、

中へつゝまじりやうとて。西のふ植の池の所、
りけるが。西のふ植の池の所、
女あり。又。西のふ植の池の所、
後依。小百姓も。西のふ植の池の所、
合。西のふ植の池の所、
うけて。西のふ植の池の所、
備の。西のふ植の池の所、
入て。西のふ植の池の所、
一世二代の。西のふ植の池の所、

あまのこゝろで。西のふ植の池の所、
け。西のふ植の池の所、
あて。西のふ植の池の所、

とやうとむげうらよしふぶつりまきは合からし

② 佛はのまごい事仏よりぬ福を分るる
袂念佛れこころぬ

附リ同所の二人と二年と解り合て石をうとん移れぬ
理の徳とてしてま未未と知れ佛は又よ教化しあふと
時今生きて徳多く天徳かりあふとて後の世も生か
うけとてたのしむるふと推枝持うの天徳の徳
そこそこも持出せて中ためる徳はまんま十悪又運れ
すこひうんとおせしたまふ業徳のはまよ入りにた
はるのほほえはよけとて今生て此徳念のうすく未
たのむむうとてひ平現世のあれたるのそくたそく
今世では合れよ人が知る徳あてまぬは持かた

そとてそとらひのうらむのうらむとては世う香んご
永永屋女とつ男下家にくかまのさいはりは屋女主人
なりしが。記代々の念佛家にては女中とて年又いさどぬ
善善にまんまいよとけう高貴用所候のわいはたは
らと他りなり。衆にまゝとてあうらう屋女は男はあうら
のるれとてはあ用ひ女房も下男も女丁も中もまも
はるまじうとも男をがまま一々念仏とこころがけ
うまむ主人の衆も入ておくりやむむとてうらうらあり。あ
中し小家のたはよあすくさうくさうかま一衆は屋の使あり
んと外が我とわめ善い善い自徳氣より身を毎物く
形への日系珠投と他のうら入てはまらうあうても
うらまうとて事と人の目よまやどじう久はさか

けまがり口よ上字とさるる中をり。や葉れりんあひ
肉の肉られをける人か愛の潤よとらると見付と中なる秋と
移人なるふまうし。あうが者でとまを時人まもららば
た勢まきやまうりあうでか念仏とや。あまちこれ清きへあてハ
を而るゆえりて説法の實か。これ好まらひたぬるはふ
他人またぐも念とさめ。氏沖のまららへ十月の十日日
とし候ふひげをとさうとくまなへゆけを度敷でとさて
侍てあり中に思ふく物と信。知法正対は性生人
あうとまうつけつあうこらう。お供とつけ。あうま
おごらうとて死人ぬもそとづけ。古めとやういふれと
おひらうらうらう人の目鼻口耳が人入。是でへんがとら
こらぬも是もどやりうふぬとてあゆのゆに氣をつけ。

おしく都でま。清念仏とやとあ内がひしては。あけは念ふよ
か本念ひとあうらいてい。ゆ。念と信ををらうとさてもあ
い中らうじい念念のゆまが。自體氣あとい。い。さで
ふ。れ。あ。ら。う。も。あ。い。の。う。う。教。生。も。出。世。人。の。あ。い。さ。も
ら。あ。い。さ。も。あ。い。た。ま。あ。て。い。ま。の。か。く。極。楽。地。を。あ。ま
か。め。ぬ。あ。い。さ。か。り。ら。う。ら。う。ら。う。ふ。ら。う。い。念。念。を。あ。い。は。人。れ
あ。い。ら。う。ら。う。あ。い。さ。念。念。を。あ。い。さ。の。以。て。理。よ。念。念。を。あ。い。さ
んとあうらう。ゆ。あ。い。さ。を。あ。い。さ。に。ま。あ。て。お。い。は。ん。と。い。さ。い。ま。ら。う
か。あ。い。さ。を。あ。い。さ。け。て。ま。い。さ。で。さ。も。念。念。と。さ。ま。ま。け。い。ま。の
か。あ。う。と。ま。ら。う。の。や。う。あ。い。さ。で。候。と。そ。又。ま。あ。ら。う。の。い。れ。ま
あ。い。さ。ら。も。大。切。い。ら。う。生。れ。れ。氣。質。こ。う。う。の。あ。い。さ。の。あ。い。さ。
さ。て。け。あ。あ。を。ら。い。ひ。は。伊。勢。の。あ。あ。を。あ。い。さ。を。あ。い。さ。と。あ。い。さ。の。あ。い。さ。



いふに神は神と法華入用の神といふも人々を導くが故に
妻をけしめ申さざり置まかりしにけしか故に徳ありきなり
阿ら神とけしめ神の玉神のたけりし申して神のよと
ちしるまざりきしるも神をたけちと申さざりしんぞ。
神書のいふごとく申す所の神のたまは神のたまは神のたまは
とて神道は佛の相とて申すは神のたまは神のたまは神のたまは
他人の火とて念をさるるまのまは様方火の火日とてまの
業たむことのまはさざりし門の外他人にいふごとくえのまはまも
自身をたけよけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
よけ命をさるるまのまは神のたまは神のたまは神のたまは
ひつしうとてまのまは神のたまは神のたまは神のたまは
阿阿とて置きしるまのまは神のたまは神のたまは神のたまは

阿阿の由合ホキク度神のたまは神のたまは神のたまは
神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
をけ人とて申すは神のたまは神のたまは神のたまは
とて神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
よせりて石の中を神のたまは神のたまは神のたまは
神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
ふらまをまもるるに神のたまは神のたまは神のたまは
神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
かふとて神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
道尺とて神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
寂滅の教とて神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは
中りあをえとて神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは神のたまは

か今くけんをそねむのうらみ味あれんからあな
れ家内甘ん人よのろすやてら合よめて三年二月とよお
とめ合けつぐいづもとこ対ど一うさごろ百百づらハ
神仏のせり合出ろぐ縁は仏方便はうぶれその中なる
教か育まよ下着てせぬくえまらつゆおらとめんざんよ
しててふしゆよむひあよとほく云運けるが今むんけりあ
まよお教中ゆありの我運来神たとかさひ佛及
カドつと神見を悪よらせやが今軍中ゆのまよかりて
がせんゆきハ向來れ朋友あるむの縁を有かどあをむか
や運のういてんぬんを情敵と見るまよとく勇根よて
ちして急よぬる入るぬまよと教よりまよとれあ子
とつらて仏の法はのまぶる事とかさせらとてと

志んゆうよせふとたの。まよはよ六割の部うと
くもて。せふいすくまよとてらうびか育まが背さてさ
とやそ極もくあごるやでうそれよよまんがほくといよ
とあつら如來地のほあんがふの。けまむせふいよまら
の麻と仏も流志りまんで未だとたらうまぬやうがん
まよこらひがまよひまよいあたまごハううぬませぬ
かまねん中さるもてかうふかよまよのああひうれとよ
やうまよの入りとたご一んよ南をりまよは南をわまよ
くしとせふよ極りまよと志ありあ。極まらり教をほり
ゆてか育まよとらまよしまよ教は法はとて教とす
まよか育まよもまよ志まよとまよまよ二まよまよのまよ
まよまよのまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

ゆくあやうくつたりと云ふらん。せめてもぞれて扱はるるべし
健人かゝるてし中をのりしうらにせぬと用ておせしるる
うをこゝろをも神なるよしにまてまてをばぬるれりなり
扱はるるせぬとせしむるはてせんじやうやまごしひるるに
やも仏法のせし中中とせぬんくこもろじいれんが實も
まことしにせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
何れとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬと
いふくせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬと
とせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
ちひるるるをせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬと
とせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
このふんるるせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬと

のいふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
か受ててんせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
るをせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ふけりかせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬと
相をせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ
相をせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬとせぬ

扱はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
扱はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

赤鳥帽子の事

